日本人の忘れもの 知恵会議

未来を拓く京都の集い

④

対談

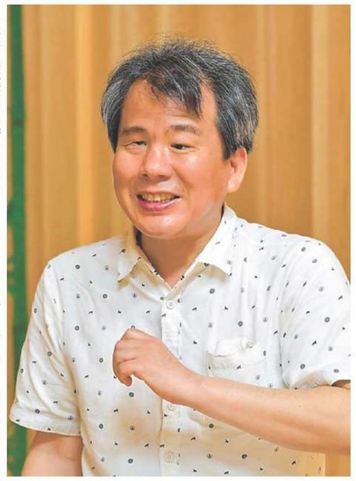
文化人類学者 広瀬浩二郎さん

能役者 味方 玄さん

琵琶法師による歌や語りなど、全盲の人たちが手掛けた芸能が廃れて久しい。一方、室町時代に世阿弥が集大成し、当時の語り口で演じられる能は今も健在だ。古典芸能のルーツと未来をテーマに、全盲の文化人類学者・広瀬浩二郎さんと能役者・味方玄さんが語り合った。コーディネーターは、京都新聞総合研究所所長の内田孝が務めた。

古典芸能 ルーツと未来

未来へ受け継ぐ Things to inherit to the future



撮影・辰己直史

ひろせ・こうじろう 1967年生まれ。87年、京大初の全盲入学者。日本宗教史、触文化論。研究の集大成として、9月2日から大阪府吹田市・国立民族学博物館で特別展「コニバーサル・ミュージアムーさわる！〝触〟の大博覧会」開催予定。

琵琶法師の精神を伝えたい 広瀬さん

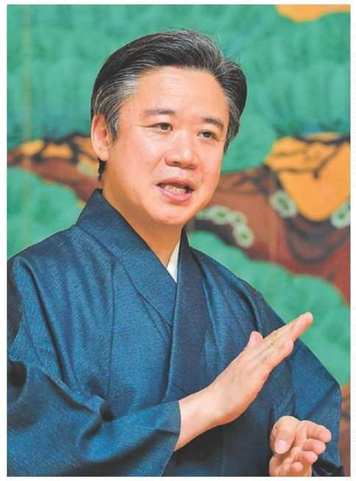
広瀬 能舞台に上がるのは初めて。足袋を履いた足裏でも板の木目を感じられ、方向はある程度わかります。もっともっと身体感覚を研ぎ澄ませば、目が見えなくても舞台上を自由に動けるのかもしれません。味方さんの腰を押しても引いてもびくともしませんね。下腹部の丹田から発する気が、能の所作の原動力なのですね。

味方 気は体内に充満するだけでなく、舞台の板を通して大地から引き合うイメージ。そろーりそろーりと板をなでるように歩くのではないことを理解いただけたでしょうか。

広瀬 盲目の旅芸人・琵琶法師や瞽女は、江戸期まで全国で活動しましたが、現在は継承者がほとんどいません。一方、能は室町時代に観阿弥、世阿弥親子が登場して発展しました。中世に起源を持つ芸能でも前者は近代化とともに衰え、後者は世代を超えて受け継がれてきました。違いは何でしょうか。また世阿弥「風姿花伝」で使われる「花」は何を指すのでしょう？

味方 世阿弥は父親や先人たちから受け継いだ奥義を伝えるため「風姿花伝」を書き残しました。花は芸の真髄を表し、「舞台上の魅力」の意味です。

広瀬 琵琶法師や瞽女の芸能は、後継者不足で衰えました。伝統死守に注力し、本来の「花」を失ったため後継者不足となったのかもしれません。



味方さん 能、初心忘れず精進重ねる

味方 古いものをそのまま現代によみがえらせても、今を生きる人の心には響かないでしょう。演じ手も今をしっかり生きて、時代や社会の空気を感じ取り、作品を通した問題提起やアピールが求められます。世阿弥は、予想外の演出で見る人の心に思いがけない感銘を起こさせることも「めづらしき花」だと言っています。

広瀬 琵琶法師による「平家物語」は音と声による語り物、聴覚芸能の代表で、世阿弥のすごさ、新しさは「平家物語」などの古典に視覚的な要素を取り入れ、舞を充実させたところでしょうか。

味方 世阿弥は芸の基礎を「一曲三体」と記します。一曲は基本技術である歌と舞、三体は老・軍・女の典型的な役柄です。世阿弥の座は元々、鬼や例えば老人などの姿形を似せる「ものまね芸」から始まり、ライバル犬王の優美な舞を見て、世阿弥は自流の能に取り入れます。観阿弥も鼓に合わせて歌い舞う「曲舞」のリズムを能の歌謡に織り込むなど今につながる能の基礎を確立しました。

能面を試着する広瀬浩二郎さん

みかた・しずか 1966年生まれ。観世流シテ方。実家の十念寺は、能を愛好した6代将軍足利義教の建立。片山幽雪さんの内弟子となり、今年は独立30年。室町時代の能「箙」を500年を経て復曲披露。著書に「能へのいざない」（淡交社）。

—能には目の見えない人や身体の不自由な人が登場しますね。

味方 「景清」で平家方の武将・景清は九州に流され、零落した盲目の景清に一人娘が会いに来ます。娘との別れの名残で源平合戦の武勇を景清自ら語る場面では平家の鎮魂を祈って「平家物語」を語る琵琶法師の姿が反映されています。「望月」には瞽女に扮して敵を油断させ、仇討ちを助ける女性も登場します。

広瀬 能や狂言など中世芸能に盲人が多く登場するのは、民衆になじみ深かった証拠。盲人芸能者は全国を旅し、民衆の生活に密接に関わったのです。

盲人芸能が衰退した原因に、世阿弥の「初心忘るべからず」を挙げることができると思います。旅をする、歩く初心を近代以降、忘れてしまった側面があるのかもしれません。

味方 芸には意識を忘ってはならないポイントが数多く、一つ一つが世阿弥の「初心」です。当たり前のように舞台上で漫然と演じると、横柄で自分勝手な芸になります。初心の連続が芸であるとの戒めを守り、精進を重ねれば本物の花が咲いた後になお花が残るような境地に至ることができるでしょう。能楽師として生きていく上での私の目標です。

能舞台で基本動作を体験する広瀬浩二郎さんと味方玄さん
（京都市上京区寺町鞍馬口）

広瀬 1990年代に大学院生だった僕は琵琶法師や瞽女、盲目の霊媒師イタコを調査しました。文字を媒介しない語り物の伝承、死者の霊に代表される目に見えない世界との交流が前近代の盲人芸能の特徴で、当時は最後の継承者がほぼぼろと活動していました。瞽女はのどをつぶし、血が出ても声を出して、声帯を鍛えたそうです。瞽女の声は空気を振動させ、多くの聴衆を魅了しましたが、その発声法は西洋音楽とはまったく異なるものです。

味方 私は入門時から声が細いと繰り返し指摘されたので、それを戒めに強く声を出そうと意識しています。ところで、瞽女や琵琶法師は市場など人の集まる場所で芸を披露することもあったのですか。

味方 イタコの取材では、何かが憑依するようなことが起こったりするのですか。

広瀬 青森県の恐山で出会ったイタコは、本物の霊媒師だと感じました。初対面で僕の個人情報を言い当てられ、ちょっと怖かったですね。「自分がしゃべるのでなく、体に入り込んだ霊の言葉が無意識のうちに口から出る」と話してました。

世界各地で、祭儀の際にシャーマン（呪術者）が目を閉じて集中力を高める事例が数多く報告されています。疑似盲目状態をつくり、霊を招き寄せるのですね。古今東西、宗教儀礼などで用いられる仮面の視野が極端に狭いことが、以前から気になっていました。能面もそうですね。視野を制限することで五感が鍛磨され、集中力が増すのでしょうか。

味方 能面を着けて舞う方が集中力は格段に上がります。ただ、視界はごく小さなポイントしか見えません。能面を着けて固囲を見ようとすると、能面は不自然な角度になり、演技や姿勢は崩れてしまいます。制約があることで何か特別な力が宿る気がしますし、自分の意思で舞っているというより身体が自然に動き、舞わされている感覚にもなります。

広瀬 イタコは首に掛けた長い数珠をまさぐり、呪文を唱えてトランス（忘我）状態に入ります。触覚（手）と聴覚（耳）が目に見えない世界、霊界への扉を開くのです。

味方 能「葵上」では巫女が登場し、梓弓を弾き鳴らしながら神霊を呼び出すための歌を歌います。梓弓は、巫女がトランス状態になるための道具になっているようです。

広瀬 梓弓は触覚で奏で、聴覚を刺激する呪具ですね。「耳なし芳一」の怪談を想起するまでもなく、弦楽器である琵琶も、神霊を招き寄せる機能を有していました。

—味方さんは、室町時代の作品「箙」を復曲されました。

味方 室町時代に上演記録があり、台本も伝わっているのになぜ長期間、上演されることがなかったのか。この問題意識から復曲に取り組むようになりました。室町時代と現代とは上演場所や環境、衣装なども異なるので本当の意味での復活と言えないかもしれませんが、演目が持っている本質を現代にどう再現し、伝えていくかを心掛けたつもりです。

広瀬 視覚障害者の職業が多様化した21世紀に、琵琶法師や瞽女の後継者不在は「歴史の進歩」と捉えられるかもしれません。今は「障害者も健常者と同じことができる」との価値観が主流で、そんな意識を持つ当事者が増えています。琵琶法師の精神、目に見えない世界を大事にする文化を後世に伝えるのが自らの役割かな、と考えています。

味方 芸能を伝えていくには、まず自分たちが生き生きと新鮮に舞台で演じ、若い世代の人たちがやりたい、見たいと思う魅力的なものでなければと考えます。あくまでも間口は広く、しかし芸能の持つ空気感を、肌で感じてもらえる機会をできるだけ多くつくっていきたい、と考えています。

—次回は9月上旬掲載予定

詳報は近くアップ

紙面はダイジェストです。詳報は近くサイトにアップします。

京都新聞社 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

©京都新聞社 無断複製・転載を禁じます